教会の成長は私の成長　　使徒 6:1-7

１．教会の成長

「使徒の働き」は初代教会の記録です。これを読むと、教会が目覚しい勢いで成長したことが分かります。主イエスは、天にお帰りになる前に、エルサレムにとどまって聖霊が与えられるのを待つよう、弟子たちに命じましたが、その時の弟子たちはおよそ 120 名でした。使徒 1:15 に「百二十名ほどの兄弟たち」とありますから、120 名というのは男性だけの数です。エルサレムに集まっていた弟子たちの中には女性もいたと記されていますから（使徒 1:14）、実際の数は 200 名ぐらいだったでしょう。ところが、ペンテコステの日に聖霊が弟子たちにくだり、彼らが力強く神のことばを宣べ伝えると、その日だけで 3000 人がバプテスマを受けて、弟子たちの群れに加えられました（使徒 2:41）。主は、毎日、イエス・キリストを信じて救われる人々を教会に加えてくださり、あまり日がたたないうちに、弟子の数が男性だけでも 5000 人になりました（使徒 4:4）。女性やこどもを加えれば、一万人以上の人々がエルサレムでイエス・キリストを信じる者となったのです。使徒 5:14 には「主を信じる者は男も女もますますふえていった。」とあり、使徒 6:7 には「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで弟子の数が非常にふえて行った。」とあります。聖書は、はっきりした数字をあげてはいませんが、学者たちは、数万の弟子たちがエルサレムにいて、当時のエルサレムの人口の 40 パーセントから 60 パーセントがキリストを信じる者になったと推測しています。数万のクリスチャン、人口の半数にもなる人々が、どんなに大きな影響を人々に与えたかは、容易に想像できます。

この人々によって、神のことばは「地域」を越えて広がっていきました。教会はエルサレムで始まりましたが、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの各地にも教会が建てられました。使徒 9:31 に「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数が増えて行った。」とあります。

次に、神のことばは「人種」を越えて広がりました。最初、神のことばはユダヤの人にしか伝えられていませんでした。しかし、ペテロがローマの百人隊長に伝道し、アンテオケのクリスチャンたちがギリシャ人にも、主イエスを宣べ伝えたことによって、「異邦人」と呼ばれる人々もまたキリストを信じ、アンテオケに異邦人の教会が出来あがったのです。使徒 11:24 に「こうして、大ぜいの人が主に導かれた。」とあります。ユダヤ人だけでなく、異邦人も救いにあずかったのです。

さらに、神のことばは、「国境」を越えて広がりました。アンテオケは、エルサレムやユダヤから遠く離れた町でしたが、エルサレムからアンテオケにいたる地域はひとりの総督が治める同じ州でした。しかし、アンテオケ教会から派遣されたバルナバやパウロによってキリキヤやガラテヤなどといった他のアジア州にも福音が宣べ伝えられ、神のことばは国境を越えるようになったのです。使徒 16:5 には「こうして諸教会は、その信仰を強められ、日ごとに人数を増して行った。」とあります。

また、神のことばは、「文化」を越えて伝えられていきました。今日のトルコとギリシャの間にエーゲ海がありますが、このエーゲ海は、当時はアジアとヨーロッパを隔てるものでした。ところがパウロは、第二回目の伝道旅行の時、神から与えられたビジョンに従ってこのエーゲ海を渡り、ヨーロッパ世界にも神のことばを宣べ伝え、第三回目の伝道旅行でも再びマケドニヤ州のピリピやテサロニケの教会、アカヤ州のコリントの教会を訪ねています。使徒 19:20 は、パウロの伝道旅行について、「こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」と報告しています。

神のことばは、「地域」を越え、「人種」を越え、「国境」を越え、「文化」を越えて広まって行き、神のことばが宣べ伝えられるところに教会が建てられ、教会が建てられたところで、さらに神のことばが宣べ伝えられて行ったのです。

２．問題による成長

このような目覚ましい教会の成長、伝道の拡大はどのようにして起こったのでしょうか。先ほど引用した聖句のどれも、「こうして」・・「増えていった。」「導かれた」「人数を増していった」と記されています。「こうして」とは、「どうして」なのでしょうか。それが分かれば、教会の成長の秘訣、伝道の方策を見出すことができるはずです。今朝は、最初の「こうして」とある箇所、使徒 6:1-7 からふたつのことを学びたいと思います。

まず第一は「教会は問題によって成長する。」ということです。もう少し丁寧に言うなら問題と取り組み解決しながら成長するということです。

多くの人は、教会にはどんな問題もなく、欠けたところもないと思いがちですが、そうではありません。確かに、教会は、他の団体や組織とは全く違うもの、この世に属するものではなく、神に属するものです。教会には、他のところにはない、神のことばと神の臨在があり、私たちはそこから恵みと平安、祝福と力とを得ます。その意味において教会は天国の出張所のようなところですが、しかし、天国そのものではありません。教会は神がそこにおられる神殿ですが、この神殿は完成されたものではなく、いまだ建設中のものです。教会は神の守りの中にありますが、この世にある間は、なおさまざまな罪と悪との戦いの中にあり、最終的な勝利を待ち望んでいます。ですから、教会にもさまざまな問題が起こります。この世では、重要視されることが教会ではあまり重きが置かれないという良い面がありますが逆に世間では問題にされないことでも、教会が教会であるがゆえに問題にされなければならないこともあります。特に聖書の教えの基本的なことがらにおいては、決して譲れないもの、譲ってはいけないものがあります。教会が目指すところと、この世が目指すところには根本的に違いますから、教会は絶えず、この世からのチャレンジを受け、摩擦を生じる時もあるのです。そして、神様は、教会内のもめごとも、外部からの意見やチャレンジも、教会を成長させるために、神のことばが広がっていくために用いられるのです。

今日取り上げました使徒の働き 6 章にあるもめごとは、教会内のやもめたちへの食糧の配給に関してのことでした。当時の社会は、貧富の差が極端で、「福祉」という考え方がありませんでしたので、教会が、貧しい人たちを助けていました。とくにやもめとなった女性に対しては、手厚い保護がなされ、どの教会にも「やもめの名簿」というものがありました（テモテ第一 5:9）。この時のエルサレム教会では、豊かな人たちがその財産を売って代金を教会にささげ、それが貧しい人々に分け与えられていました。使徒 4:34 には「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。」とありますから、教会は、貧しい人たちに対して十分な配慮をしていたことを示しています。しかし、どんなに細心の配慮をしていても、人の集まるところには、何らかのもめ事が起こるものです。ギリシャ語を話すユダヤ人から「ヘブル語のやもめたちには毎日配給があるのに、私たちには、配給がない日がある。」という苦情が出ました。「食べ物の恨みは恐ろしい。」と言いますが、このもめ事は、たんに食べ物の問題だけだったのでしょうか。聖書がわざわざ「ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。」と書いています。この言葉はつぶやきではありません。公に理路整然と声をあげることです。ということはこの背景には、ヘブル語を話す人たちとギリシャ語を話す人たちとの間に不一致があったことが推測されます。ギリシャ語を話すユダヤ人というのは、外国生まれのユダヤ人で、外国から、母国に帰ってきたのですが、まだヘブル語を話せないでいる人たちのことでした。この人たちは、ことばの壁もあって、いろいろな面で肩身の狭い思いをしていたと思われます。しかし、教会は、ひとつとなっていかなければなりません。それが神様の御心であり、願っておられることです。「やもめたちへの配給」をめぐって実は、教会の霊的一致という大きな問題が含まれていたのです。神様は、この配給をめぐるもめ事を通して、教会にさらに一致を与えようとされたのです。7 節に「こうして神のことばは、ますます広まって行った。」

とあるように、教会は、この問題を解決することによって成長して行ったのです。ですから、私たちは、教会の問題をただ批判、評価するだけで終わったり、傍観者となってできるだけ関わらないようにしようとするのでなく、主の導きと助けによって、問題の解決を求めていきたいと思うのです。

３．人物による成長

次に今日の箇所が教えていることは、「問題は人物によって解決する。」ということです。組織を動かすのに（人）、（資金）、（方法）、（管理）が必要なことはよく言われます。しかし、それらの中で一番大切なのは人、人物です。神は、常に「人」をお用いになります。お金や、方法、管理は「人」に比べれば二義的なものです。神様は、神の民を救い出すために、モーセを選び、ヨシュアを選び、サムエルを選び、ダビデを選ばれました。そして、全世界の、すべての人の罪の問題を解決するために、神の御子が「人」となられ、神は、「人としてのキリスト・イエス」（テモテ第一 2:5）を救い主として選ばれたのです。「問題」を引き起こすのは「人間」ですが、それを解決するのも「人間」なのです。

ですから使徒たちが「やもめたちへの配給」の問題を解決するために最初にしたことは、「人」を選ぶことでした。使徒たちは、弟子たちに、この問題を解決できる人を七人を選ばせました。その七人は「御霊と知恵とに満ちた人」（3 節）、あるいは「信仰と聖霊とに満ちた人」（5 節）でなければなりませんでした。「やもめたちへの配給」というのは、直接には霊的な問題ではなく、きわめて日常的な食べ物の問題です。ですから、やもめたちへの配給を平等にするために、何かのルール、規則を決めて対応をすればよかったのかもしれません。それに、奉仕としてもせいぜい、ひとりかふたりの人で事足りたかもしれません。しかも、「信仰と聖霊に満ちた人」などというやや抽象的な資格よりも、「計算が正確で、作業が速い人」という資格だけで良かったかもしれません。それが適材適所というものでしょう。しかし、そうしませんでした。何故かというなら、やもめたちへの配給の問題の背後には、「教会の一致」という霊的、信仰的な問題があったからです。それで、使徒たちは、この問題を解決する人物に霊的、信仰的な資質を求めたのです。この基準は、今日も変わることがありません。小さな問題の背後に、大きな霊的、信仰的な問題が横たわっていることがあるからです。教会は、どんな問題からでも、霊的、信仰的に成長しなければなりません。それで、聖書は、教会の執事は「きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人」（テモテ第一 3:9）であるようにと教えているのです。「信仰の奥義を保っている人」というのは、イエス・キリストが主であり、神であり、救い主であることをきちんと理解し、信じている人、主イエスと、表面的なかかわりではなく、自分の罪を悔い改める素直な心で主イエスを愛し、主イエスとの親しい交わりを持っている人、この世の思想や、人間的なものの考え方、また、間違った教えに引っ張られないように、いつもみことばに耳を傾けている人のことです。これは、すべてのクリスチャンに求められていることですが、とりわけ、教会で問題解決にあたる人には、他のどんな能力よりも、こうした霊的、信仰的な資質が求められているのです。

４．教会が成長すると私も成長する

この月末には教会総会があり、今年は役員選挙がありますが、こうした聖書が求める「資格」や「資質」について聞いた時、それに対してどう反応されるでしょうか。ある人は、「あの人は、聖書が教えている資格を持っていない。この人はどうなんだろうか」と考えられるかもしれません。しかし、聖書は、他の人を評価するために読むべき書物ではなく、自分のために読む書物ですから、他の人を評価する前に、自分はどうだろうかと考えてみる必要があります。次に、では自分を見て「そんなの無理だ。どうせ私には資格がないのです。だから何もしないのです。」という人もあるかと思います。これも神様は、私たちを責めたり、退けるために「資格」や「資質」といった高いハードルを出しているのではありません。むしろ「資格のない者かもしれないが、恵みによってそのような資質を持ちたい。」と願うのが信仰の姿では

ないかと思うのです。「私には、他の人のように立派でもないし、その人たちがしているようなことはとてもできません。」と退くのはある意味謙虚な発言だと思います。ただ謙虚であることは素晴らしいことですが、主があなたを強くしようとしておられるのを受け入れようとしないのは、ほんとうの謙遜ではありません。テモテ第一 3:13 には「執事の努めをりっぱに果たした人は、…キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」とあります。神があなたに与えてくださった奉仕、与えようとしておられる奉仕は、神が、それによってあなたの信仰を強めようとしておられるものなのです。

最後にこの選出は 2 節にありますように弟子たち全員の中で行われました。12 使徒が任命したのではありません。それはどういう意味があるのでしょうか？　選ぶ者も責任を持ったということです。選んだ後はその人たちにすべてを任せて、後は評価する者となったのではないのです。5 節の「この提案は全員の承認するところとなり」、がそれを表わしています。

このようにして配給をめぐる問題が神様の御心にかなった形で解決されたことによって教会はさらに成長してゆきました。「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。」（7 節）とある通りです。